



- 故郷を遠く離れた土地で、今も避難生活を送る福島県双葉町民の日常を9か月にわたって記録したドキュメンタリー●
監督：船橋淳 テーマ音楽：坂本龍一「for futaba」 2012年/日本/96分/公式ホームページ <http://nuclearnation.jp/>

11月24日(土) 谷中～千駄木～白山

「フタバから遠く離れて」1日リレー上映会

～あなたのとなりのフタバ～

* 英語字幕付き with English subtitles

「谷中暮色」(2009年)の船橋淳監督の新作(10/13公開)を監督の地元の3つの会場でリレー上映します。東京電力福島第1原発の事故後、双葉町は町全体が警戒区域となり、1423人が約250km離れた埼玉県加須市の旧県立騎西^{きさい}高校へ避難、地域社会丸ごとの移転という前代未聞の事態となりました。激変した環境のもと、双葉町の方々はどう感じ、どんなふうにごろごしてこられたのでしょうか？原発事故から1年半が過ぎて今なお100人以上が暮らす避難所、いつ帰れるとも知れない故郷…これは、原発52基を抱える日本列島のどこでも起こりうる現実なのです。



船橋淳監督

上映会場は谷中、千駄木、白山、それぞれ地域で人と人のつながりがつくってきた場です。

3会場とも船橋監督のお話あり、谷中と千駄木会場では双葉町から避難されている方々のお話もうかがえます。

映画とお話をとおして、原発震災と隣り合わせで進行している今をみつめなおしてみませんか？



14:00～16:30 谷中コミュニティセンター [大広間] (開場13:30)

長年地域に根ざした施設として親まれてきました。新たに防災コミュニティ施設として建て替えられるため、11月24日をもって閉館となります。大広間最後のイベントです。(台東区谷中5-6-5)

■資料代1000円 ■定員70名/ご予約ください



17:30～20:00 谷根千〈記憶の蔵〉(開場17:00)

かつては個人宅の貯蔵庫であった大正時代の蔵です。現在は谷根千工房 (<http://www.yanesen.net/>) と映画保存協会が、この地に暮らす人々の記憶の宝箱として蘇らせるべく活用しています。(文京区千駄木5-17-3)

■参加費1000円 ■定員35名/予約不要



21:00～23:00 JAZZ喫茶「映画館」(開場20:45) <http://www6.ocn.ne.jp/~eigakan/>

音にこだわりを持つJAZZ喫茶です。LPレコードに重きを置いています。自作オーディオ、ウッドホーンは木からの削り出しです。看板下の映画カメラ風オブジェが目印。(文京区白山5-33-19)

■参加費1000円(ドリンク代別) ■定員20名/予約不要

船橋淳監督プロフィール

映像作家。東京大学教養学部表象文化論分科卒後、ニューヨークで映画制作を学ぶ。長篇映画『echoes』は仏アノネー国際映画祭で審査員特別賞、観客賞を受賞。第2作『BIG RIVER』（主演オダギリジョー、製作オフィス北野）はベルリン映画祭、釜山映画祭でプレミア上映される。またニューヨークと東京で時事問題を扱ったドキュメンタリーの監督も続けており、アルツハイマー病に関するドキュメンタリーで米テリー賞を受賞。今作の撮影過程を記録した著書『フタバから遠く離れて―避難所からみた原発と日本社会』（岩波書店）を今秋出版。[劇場用映画]『桜並木の満開の下に（仮題）』（2013年公開予定）、『フタバから遠く離れて（NUCLEAR NATION）』（2012年全国公開）、『谷中暮色（Deep in the Valley）』（2010年全国公開）、『BIG RIVER』（2006年全国公開）、『echoes』（2001年全国公開）

朝日新聞(夕刊) 2012年10月5日(金)

評

フタバから遠く離れて

被災者への視線 迫力生む

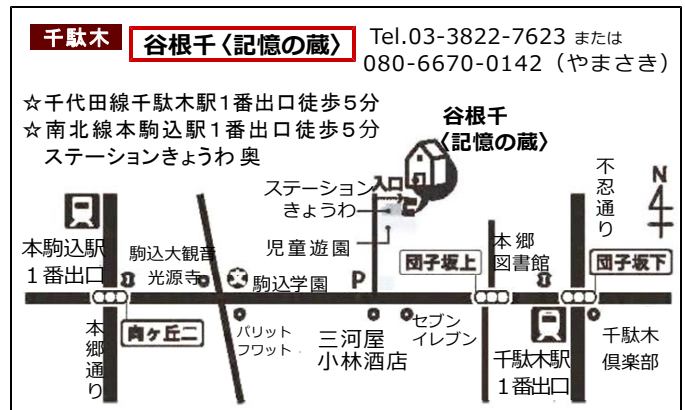


福島県双葉町は原発の事故で警戒区域となり、全町民は避難を強いられ、そのうち数千人が埼玉県に集団移住した。これはその姿を記録したドキュメンタリーで、3・11の記録映像があふれる中、原発事故に焦点を絞った点で珍しい。廃校になった高校の教室に聲を敷き、当てのない帰郷を待つ人々。初老の男性は配給の弁当を食べかけて、うんざりした表情で紙に包み戻す。津波で母を失った青年は、震災の翌日、救助作業が水素爆発で中止されたことを悔やむ。双葉町には原発の5号機と6号機があり、町長はさらに7、8号機を誘致したが、今、怒りを露にする。

避難から3カ月後、一時帰宅が許される。そのとき、地震と津波の傷痕が初めて画面に現れる。人々は破壊された家の姿に呆然となり、消失してしまった自宅の跡に言葉を失う。監督は撮影の大部分も担当する船橋淳で、全編、ただ被災者の姿を提示する。原発による電力の消費者として、寄り添うことなどできない。そんな姿勢からくる距離感が、映画の迫力を一段と強めている。全身を白い防護服で覆った人が家の跡に立つ姿は、近未来の光景を思わせなくもない。が、それが楽しい想像などにならないことは、放射能のもとに放置された牛たちのミイラ化した姿が生々しく告げる。消失した家の跡は奪われた日常の残骸にはかならない。そして、今、廃校での非日常を日常として強いられている。だがその前に、原発に依存した日常を送ってきた。これら三つの日常の移り変わりは、単に双葉町の人々だけのことだろうか。このドキュメンタリーは、原発が存続する限り、あり得るだろう、ごく近い未来の姿を、現在形において差し出す。

東京で13日公開、順次各地。(山根貞男・映画評論家)

【会場案内】



【谷中会場の予約方法】(記憶の蔵・映画館は予約不要です)

- H P : <http://kokucheese.com/event/index/59068/>
- メール mmrinn@view.ocn.ne.jp (河村)
- 電話 050-3059-6328 (小林)

主催 「フタバから遠く離れて」1日リレー上映会実行委員会
(問い合わせ: 地域から未来をつくる・ひがし広場
<http://www.jtgt.info/> 090-1265-0097 植松)

協賛 谷根千工房、JAZZ喫茶「映画館」、「原発」都民投票の会、谷中防災コミュニティを考える有志の会、りんご野、光源寺